

不朽の名作、一堂に。

特集／丸山晚霞^{ばんか}を知る

BANKA MARUYAMA

11月3日、丸山晚霞記念館が文化会館サンテラスホール内に開館します。
郷土を代表する画家、丸山晚霞。明治・大正・昭和と時代を駆け抜けた彼の人生をたどり、遺した絵画の魅力に迫ります。ようこそ、丸山晚霞の世界へ――

関 晴風 丸山晚霞肖像画

I 丸山晚霞の人生。

生い立ち

丸山健作（雅号晚霞）は幕末の慶応3年（1867年）5月3日に、養蚕・蚕種製造業を営む農家の次男として生まれ、仕事柄、父が横浜へ行き来し、健作少年はみやげの極彩色の錦絵を食い入るように見ていたといえます。村の庄屋であった晚霞の家の蔵には、珍しい舶来品の品々が納められており、その虫干しの日を晚霞は心待ちにしていたといひ、そのころから洋画を志すようになりました。



▲若いころの晚霞（左）、右は画家の河合新蔵



美術の勉強をした少年／青年期

13歳のころから山ノ内町の南画家に師事し、18歳で上京して勧学舎に入塾。翌年には帰郷し、その後母校である祢津小学校で代用教員を務め、油彩の肖像などを描きました。

明治21年に再び上京し、明治23年の内国勧業博覧会に初めて油彩の大作を発表して入選。しかし翌年には、家庭の事情もあって帰郷、家事の手伝いなどをして絵に専念できない日々を送っていたといわれています。



北佐久郡志賀村（現佐久市）でキノコ狩りをした時の晚霞（右）と島崎藤村（明治37年）

丸山晚霞の歩み

西暦

通歴

1867
（慶応3・1歳）

5月3日、父平助、母けんの次男として生まれる。名は健作。
★王政復古の大号令。

1879
（明治12・13歳）

3月、祢津村小学校卒業。

1884
（明治17・18歳）

上京、東京神田錦町の勧学舎に学び、翌年帰郷。

1886
（明治19・20歳）

2～5月頃、当時上田中学校に図画教師として赴任していた望月俊俊に学ぶ。このころ、祢津小学校に代用教員として勤務。

1888
（明治21・22歳）

5月、代用教員を辞して上京、画塾「彰技堂」に入塾。

1889
（明治22・23歳）

★田中駒堂業開始。

1890
（明治23・24歳）

10月、第1回明治美術会が開催される。新帰朝の原田直次郎・松岡寿らの作品に加え、参考出品された西洋人作家の作品に触発される。

1895
（明治28・29歳）

★祢津村、北御牧村、それぞれ合併により誕生。

1896
（明治29・30歳）

4月、第3回内国勧業博覧会に（油画人物が入選（丸山健作名）。帰郷して定津院住職より「晚霞天秀」の法名を受ける。以後号を「晚霞・印を「天秀」とする。

1898
（明治31・32歳）

初夏、群馬県沼田市付近で写生中の吉田博と知り合い、水彩画に関心を持つ。

1899
（明治32・33歳）

初夏、吉田博とともに信州・飛騨地方に写生旅行。
★祢津小学校の新校舎落成。

1899
（明治32・33歳）

明治美術会創立10周年記念展に水彩画25点を出品。

1899
（明治32・33歳）

吉田博の紹介で、三宅克己と知り合う。三宅から渡米を勧められる。同じ頃、大下藤次郎を知る。



明治37年茸狩りの記念撮影（左端が丸山晚霞）



明治33年12月ボストンアートクラブにて



祢津村の生家

晚霞
思い出
ギャラリー

吉田博との出会い 水彩画の道を歩む

晩霞といえば水彩画の巨匠。なぜ晩霞は水彩画を描くようになったのでしょうか。晩霞が水彩画に開眼したのは明治28年、29歳の時です。それは、ある人との偶然の出会いから始まりました。

家の仕事で群馬県沼田市にいた晩霞は、利根川の清流を写生していたある青年画家に出会い、彼の絵に胸を貫かれました。それは緻密な描写で風景の香りまでも写し取ったような水彩画だったのです。青年画家の名は吉田博、この時20歳。話し合ううちに二人は共鳴し、その夜は共に宿をとって語り明かしたといいます。

翌年、二人は共に北アルプスの山々にスケッチ登山にかけました。二人は深く親交を結び、晩霞の画家としての生活に一大転機をもたらしたのです。時代は明治、白黒の写真ですら紹介されることの少なかった信州の風景を、晩霞は色鮮やかな水彩画で人々に伝えることになりました。水彩画家丸山晩霞の本格的な足跡がここから始まりました。

明治初期の日本画壇と晩霞

日本で本格的に洋画が盛んになったのは、明治9年工部美術学校創立に際して、イタリアから専門家を招いて正統な洋画が教えられたことに始まっています。

特に水彩画は、明治30年代に日本の画家の作品が欧米で高い評価を得て、黄金時代を迎えました。

こうした明治期の美術界で、信州出身の洋画の巨匠として知られるのが、丸山晩霞と伊那市出身の中村不折でした。晩霞は水彩画、不折は油彩画で、美術団体「太平洋画会」の重鎮となったのです。

大成功の渡米、欧州を順礼

明治31年、晩霞は明治美術会創立10周年記念展に水彩画25点、またその翌年にも多数の水彩画を出品し、内国勸業博覧会以来再び画壇に登場しました。外遊から帰国して新進気鋭の人気画家だった三宅克己がこれらの絵に感服し、以後親交を結ぶようになり、三宅克己は小諸に転居して、ともに画架を並べて写生するようになりました。

明治33年、三宅克己の熱心な励ましに動かされ、ほかの画家3人とともに渡米しました。このときの渡米は国費による留学生とは違い、片道切符でアメリカに渡って現地では絵を売り、その収入で世界を写生旅行するというもので、まさしく冒険そのものでした。すでに現地入りしていた2人と合流し、6人で展覧会を開催したところ、一万人以上の入場者、数千ドル単位の売上げを記録するなどの大成功をおさめました。はじめは「どうなることか」と不安げに送り出した称津村では、突然アメリカから巨額の為替が送られてきたことから、驚きと歓喜に満ちたといいます。



▲晩霞たちの成功を伝えるアメリカの新聞

丸山晩霞の歩み

西暦

遍歴

1900
(明治33・34歳)

ほかの3人とともに横浜港を出港し、渡米。ボストンで6人による水彩画展を開催。

1901
(明治34・35歳)

プロビデンス、ワシントンで水彩画展開催、好評を博す。その後イギリス、イタリア、スイスなど各国を旅行。神戸港に帰着。

1902
(明治35・36歳)

★境橋完成開通。
晩霞らは明治美術会を改称し「太平洋画会」を創立。三宅克己の後任として小諸義塾図画教師に就任。青木繁、坂本繁次郎ら称津を訪れる。

1904
(明治37・38歳)

★北御牧小学校新築校舎完成。
島崎藤村、小説「水彩画家」発表。

1905
(明治38・39歳)

★津津郵便局開局。
小諸義塾を辞して上京、後進の指導にあたる。

1907
(明治40・41歳)

晩霞、「水彩画法女性と趣味」刊行。島崎藤村の「水彩画家」でモデル問題起こる。

1908
(明治41・42歳)

小笠原群島を旅行。

1909
(明治42・43歳)

★浅間山大噴火。
長野県下で頒布会を開催。

1911
(明治44・45歳)

神戸を出港し、渡欧、イギリス、フランス、イタリア、スイスの各地を取次旅行。

1912
(明治45・46歳)

7月初旬帰国。8月、10月にかけて飛騨の山岳地方を取次旅行。滞欧記念水彩画展覧会を開催。

1913
(大正2・47歳)

★北御牧村青年会発足。
ほかの画家らとともに「日本水彩画会」を創立。

1915
(大正4・49歳)

《犀川の秋》が宮内省賞上となる。



明治44～45年頃イギリスにて(右端が丸山晩霞)



渡欧途中の船上にて



明治44年、神戸港を出発する晩霞

その後晩霞はヨーロッパ順礼の旅をして帰国しました。帰国後は当時の美術団体のトップである「明治美術会」の新会務委員に選ばれるなど、画家としての地位を確立するとともに、自然研究に努力する日々が続きました。そして晩霞らは明治美術会を改革して「太平洋画会」を結成、明治35年ごろから数年間、水彩画はまさにその黄金時代といえるくらいに盛んになり、いうまでもなく晩霞もそのけん引役となったのです。

小説「水彩画家」の
モデル問題―島崎
藤村らと交わる

島崎藤村は小諸義塾の教師であつた關係で晚霞と親交を結ぶ間柄となりました。しかし明治40年、藤村の小説「水彩画家」のことで晚霞とモデル問題を起こし、世間をにぎわせました。晚霞の抗議は、小説の主人公が晚霞の私生活のまるうつしであり、世間の誤解を受けることを遺憾としたものでした。

モデル問題はともかく、このことが社会現象にまでなつたことから、晚霞がそれだけ当時の社会に

注目される存在であったことを示しているといえます。

指導と普及に尽力した晩霞

明治38年、晚霞は再び上京、盟友である大下藤次郎^{おおしたふじろう}とともに太平洋画会研究所、日本水彩画会研究所で後進の指導に務めました。明治44年には2回目となるヨーロッパ旅行を行い、多くの作品を描いています。翌年帰国して帝国ホテルで滞欧記念水彩画展覧会を開催し、大正12年には中国・インドの各地で巡回展を開催するなど、その活動はとどまるところを知りませんでした。

晚霞の晩年

昭和7年、晩霞は「国産水絵用材研究会」の発起人となり、それまで輸入品だけに依存していた画用資材を国産に切りかえることに努力しました。また昭和11年に津村の旧画室を改築してアトリエ羽衣荘が落成し、そこで研究を続けました。しかし、次第に病をわずらうようになり、昭和17年3月4日、晩霞が終生愛しつづけたこ

のふるさとの羽衣荘で76歳の生涯を終えたのです。

没しても消えない
晚霞の足跡

当時の画家の大半は上京して著名な画家に師事しながら研究や制作を行ったのに対し、晚霞はふるさと信州にこだわり、自然を愛して田園や山岳風景などを描きつづけました。また水彩画にこだわったユニークな画家として美術界にその大きな足跡を残しました。没後太平洋画会員の手によって建てられた墓碑銘には「水彩画家 丸山晚霞ここに眠る」ときざまれています。



▲西宮に静かにたつ墓碑銘

西暦	1917 (大正6) 51歳	1920 (大正9) 54歳	1921 (大正10) 55歳	1923 (大正12) 57歳	1926 (大正14) 59歳	1926 (大正15) 昭和元年 60歳	1929 (昭和4) 63歳	1930 (昭和5) 64歳	1932 (昭和7) 66歳	1936 (昭和11) 70歳	1940 (昭和15) 74歳	1942 (昭和17) 76歳
遍歴	朝鮮半島に初めて旅行。各地の風景・仏教寺院等スケッチ。田中町常田の法善寺で関清風・油井小深とともに「釈迦八相（一代）」を制作。	在京長野県出身画家によつて結成された信濃美術協会に参加。	北海道旭川市に旅行。	翌年まで震災救済を目的とした展覧会開催のため中国・東南アジア、インドを旅行。	第12回日本水彩画会展に、中国・インドの風景画を特別展示 ★津渚小学校、ラジオを取り付ける。	樺太へ写生旅行。 ★布引鉄道開通。	満州（中国東北地方）へ旅行、大連市に約1か月滞在。 ★大日向駐在所新築完成。	台湾を旅行。 ★東部実科中学校設立。	「国産水給用材研究会」の結成に参加、發起人となる。 ★五・一五事件。	「日本山岳協会」創立。創立会員として参加。 称津にアトリエ「羽衣荘」を新築、落成式を開催。 ★二・二六事件。	献納用の取材のため南洋諸島へ旅行、サイパン島、パラオ島等を取材。帰国後病を得て羽衣荘で療養生活。	3月4日、羽衣荘で死去、享年76歳。



新築当時の
羽衣荘



羽衣荘の前に
立つ晚霞



大正13年、
インドにて



初夏の高原

初夏の高原

大正期に書かれたものではないかと推測され、晩霞の大作といえる。この題名は晩霞本人が付けたかどうかわからないが、誰が見てもこの題名を思わせるほど初夏独特の季節感、高原の空気が表されている。紙の白さを生かした透明な表現と、力強さを出すための不透明な表現が部分的に併用されている。メインとなる樹木を中央に据えており、晩霞作品としては大胆な構図が特徴的である。

霧と石楠花

晩霞が多く描いた山岳風景の中でも代表的な作品。実際にスケッチした写真と空想の世界とを合わせたような不思議な作品といえる。前景に高山植物、背景に雪山、その中間に高山を象徴する岩、霧が配置されており、現実にあった風景とは考えられないが、晩霞の取材の蓄積から彼独自の世界を描いている。水彩画の技法であるが、日本画も多く手がけた晩霞らしく、日本画の構図を水彩画にも用いたものであるといえる。



霧と石楠花



昔の羽衣荘（羽衣荘の庭）

昔の羽衣荘（羽衣荘の庭）

いつの制作かは分からないが、自宅の庭を描いており、夏の季節感がよく感じられる。季節感のある花、その花のある庭と建物が描かれており、どれかひとつを注目して描いたというよりは、全体から感じられるものを表現している作品である。技法としては典型的な透明水彩であり、何気ない身近な自然を表した晩霞らしい作品といえる。

自然の美しさを追求。

解説者の紹介

林 誠さん

長野県伊那文化会館学芸員。丸山晩霞を含む近代日本洋画に関する展覧会を数多く手がけている。展覧会カタログなどの著述も多い。丸山晩霞研究の第一人者。



Ⅱ 晩霞の絵の魅力と精神世界。



千曲川 (橋)



杓葉畑



アンバレー村 英国の初夏

明治、大正、昭和——晚霞が遺した功績

晚霞は水彩画の制作と普及に大きな功績を遺した画家でした。制作という点では、「名所旧跡の風景が日本の美しさである」とする価値観が浸透していた時代に、晚霞が身近にある山、名もない丘、日常の庭先、一般の人が暮らす農村などを鮮やかな水彩画で描いてみせたことは、当時の人々を驚かせました。それは、人々が住まう地域の美しさを再認識させる力を持つており、「自然と美しさ」に對

する価値観を大きく変えたと言っても過言ではありません。晚霞は明治、大正、昭和を通じて、人々に影響を与え続けました。

また、晚霞は水彩画の普及に尽力した画家でした。講習所で後進の指導にあたったり、美術団体の要職に就いたり、県内でも頒布会を開いたりなど活動は多岐に渡っています。それ以外にも雑誌へエッセイを投稿したり、絵葉書の口絵を描いたり、水彩画の入門書

を出版したりと、水彩画は誰でも手軽に親しめるものであることを普及し、美術家のみならず一般の人々の創作意欲を大いに刺激しました。

誰もが学校で一度は体験する水彩画。ここまでポピュラーになったのは、晚霞を中心とした水彩画家の功績なのです。

生きつづけた郷土の自然を愛する心

晚霞は水彩画で何を表現しようとしたのでしょうか。晚霞の絵はほとんどが自然風景を描いたものです。晚霞は、その場にいた人間にしか分からないであろう、自然が生み出す「感じ」や「雰囲気」など、晚霞が自然から感じた「何か」を人々に伝えようと思ったのではないのでしょうか。このことは晚霞の絵に際立つ特徴といえます。そして私たちは絵を通して、その「何か」を晚霞と語ることになるのです。

自然と文化の中で育った感受性豊かな少年時代にあることは確かです。登山や普段の暮らしの中から自然の豊かさや美しさを見いだし、自然に対する尊敬、畏敬の気持ちを抱いたのでしょう。晚霞の芸術活動の根源には、故郷への尽きない愛情があり、それは終生晚霞の心の中に生き続けたのです。

いものであったということです。郷土の自然への愛情を根源に、その思いを「普遍的な美の世界」へ高めていく才能と技術を持ち合わせた画家が晚霞であり、ゆえにどこを描いたものであっても、また誰が見ても郷土愛や郷愁の念を起こさせるものとして、晚霞の絵が私たちの前にあるのです。

(監修 林 誠学芸員)

参考文献

- 林 誠 「丸山晚霞と日本の水彩画の流れ」長野県信濃美術館発行 平成10年10月
- 長野県信濃美術館他「もうひとつの明治美術——明治美術会から太平洋画会へ」展図録「もうひとつの明治美術展実行委員会発行 平成15年7月

Ⅲ 晩霞に惹かれてやまない人たち



たかはし せつ
高橋 節さん

高橋節さん…大正4年生まれ、小諸市在住。日本人形作家。東御市で人形教室を開き、多くの門下生に慕われている。

私の家が羽衣荘のすぐ近くで、父が晩霞先生とともに小諸義塾で教師をしていたこともあり、先生とは家族ぐるみでお付き合いをしていました。先生はとても正直で親切、嘘などつけない方で、近所からも慕われていました。私たちが畑に出るといつも「お茶を飲んでいけ」と声をかけてくださり、仕事することより先生と話すことが楽しく、畑のことがなかなか進まなかったという思い出もあります。羽衣荘にはよく名士が訪ねてきましたが、その度に私たちを招いてくださるので、着替えをもって畑に出たほどです。

いつものようにお茶飲み話をしていたとき、先生が突然「号をくれるわ」と言い出し、「霞」の字をとって「小霞」という号をおくってくださいました。私はこの号をずっと大切にしています。私も芸術活動に身を置いています、作品にはその人の気持が赤裸々に表われるものです。先生の絵は清らかで濁りがなく、先生の絵はまさに先生そのものです。

先生が最期を迎えるとき、私は枕元にいました。先生は苦しむことなく静かに旅立たれました。それから時は過ぎましたが、先生は私の心のなかで今も生き続けています。



やまこし ひでよ
山越 英世さん

山越英世さん…大正13年生まれ、西宮在住。晩霞他界後、短歌の一派「アララギ」に入る。丸山晩霞記念館建設推進委員会初代会長。

家の田が羽衣荘の近くにあり、私は子どものときから田で仕事をしていました。昔はポットなどありませんので、羽衣荘によく水をもらいに行っていたのです。先生は私に「小さいのによくだねえ」と言ってくれました。

先生は、絵はもちろん、俳句の大家でもありました。先生は少年だった私に「俳句をしないか」と声をかけ、私に「琴聲」という号をおくってくださいました。俳句をつくっては先生に見ていただこうと、よく羽衣荘を訪れました。先生は俳句大会で一番になった人に色紙を贈っていて、私も頂きました。その一点一点が先生の思い出とともに、私の宝物になっています。先生がご病気のときは近所の人たちで「お百度参り」をしました。温厚で人間味があり、誰からも慕われる先生でした。先生が他界されてから後も私は俳句を続け、短歌の世界に入っていました。私はいつも先生が遺してくれた写真・写生の精神を大切に、歌をよんでいます。いただいた短冊の中に、私が大事にしている先生の句があります。

「山高し 高し雲雀は より高く」
先生との思い出は忘れられません。



おぎわら よしお
荻原 芳雄さん

荻原芳雄さん…昭和10年生まれ、田中在住。日本水彩画会会員、同会上田支部長。東御美術会会長。

私自身は晩霞先生とは面識がありませんが、私が水彩画を習った先生方は、「祢津美術会」をつくっていた方たちでした。いうまでもなく私の先生方は晩霞本人や、作品の影響を受けています。この東御の地には、晩霞の水彩画の流れが脈々と受け継がれているといつてよいでしょう。

私は日本水彩画会の会員ですが、丸山晩霞といえば私たちの会の先駆者であり、全国の水彩画家の尊敬を集めている人です。私は晩霞の水彩画を多く見ていますが、そのなかで思うことは、晩霞の絵こそ我々水彩画家の原点ではないかということです。

この東御市は、県下においても水彩画が盛んな地域で、人口、質ともに突出しています。それは、晩霞という巨匠がこの地にしっかり水彩画を遺し、諸先輩がずっと守り、私たちが受け継いでいることの証といえるのではないのでしょうか。

将来ある子どもたちがこの記念館を訪れ、東御の文化ともいえる水彩画の楽しさを味わってもらえるようになれば本当にうれしいことだと思っています。

デジタルアーカイブ

資料提供：丸山晚霞記念館
取材協力：西宮区の皆さん、東御市文化協会の皆さん



開館時間：午前9時から午後5時まで
休館日：毎週月曜日（祝日の場合翌火曜日）
祝日の翌日：12月28日～1月4日
展示替え期間
入館料：一般 200円（団体150円/15名以上）
小中学生 100円（団体70円/15名以上）
市内の中学生以下無料
（*企画展は別途料金）



IVこれが丸山晚霞記念館だ。



今こそ大切な晚霞の心。記念館がそれを受け継ぐ。



まるやま あさひ
丸山 旭さん
(丸山晚霞五男)



とほり たけゆき
戸堀 武之さん
(丸山晚霞記念館
建設推進委員会会長)

丸山晚霞記念館が宿願叶い、多くの困難を乗り越え開館する運びとなり、丸山晚霞記念館建設推進委員会、並びに関係各位のご尽力の賜物と感謝申し上げます。

父が我が国の水彩画壇に遺した功績は大なるものがあります。山岳と植物、特に石楠花に深い理解と親しみを持って憧れ、とうとうヒマラヤまで行つて以来、石楠花好きの第一人者になりました。山岳画家として一流の突っ込み方で、終始一貫しての開拓者であつたといえましょう。

晚霞の生涯は76歳と短命でしたが、本業の絵を描くことはもちろん、海外旅行、山岳登頂、高山植物の研究、原稿書き、講演など常人では真似のできないことが多かったと思います。

辞世の句は「思うことは 皆やって眠る 桃のころ」でした。あと10年も生きて民主主義の世界を体験させたかったと痛感しています。

私は晚霞先生に小学生のころよくお会いし、羽衣荘で開かれた展覧会で絵を見たときの感動は今でもはっきり覚えています。

平成元年に丸山晚霞記念館建設推進委員会が創設され、記念館の実現を目指して多くの活動してきました。なかには大変だったこともありましたが、先生の絵が縁で新しく知りあえた方がいたり、展覧会が成功したりと、うれしかったこともありまます。一口に18年と言ってもその道のりは長く、記念館開館を前に今はまさに感無量です。

私たちはこれからも協力会をつくって記念館を支えていきます。そして晚霞先生その人と、絵の素晴らしさを多くの方にお伝えしていきたいと思っています。